

追手門学院大学社会学部芸術文化事業

映画上映会 & トークセッション

空に聞く

Listening
to the Air

上映作品
監督 小森はるか

(C)KOMORI HARUKA



2023年1月7日(土) 13:00-16:00

12:30 開場 | 13:00 上映 | 14:45 トークセッション

会場 茨木市福祉文化会館(オークシアター) 5F文化ホール

参加費 無料

企画・コーディネート 松谷容作
テクニカル・アドバイザー 林勇気
映写技師 中川允子
舞台設営 毎日舞台
宣伝美術 見増勇介、永戸栄大(ym design)

主催 追手門学院大学社会学部
共催 茨木市・公益財団法人茨木市文化振興財団
協力 追手門学院大学社会学部社会文化デザインコース

学校法人 追手門学院
追手門学院大学

次なる
茨木へ。

公益財団法人
茨木市文化振興財団
IBABUN
Ibaraki City Cultural Foundation

かつての町の上に新しい町が作られていく。

震災後の陸前高田でいくつもの声を届けたあるラジオパーソナリティの物語。

上映作品

空に聞く

Listening to the Air

Director's statement

『空に聞く』というタイトルには二つの空の意味を含めました。一つは、亡くなられた方たちのある空(空)に耳を澄まし、想い続ける人としての阿部裕美さんの姿を思いつけました。もう一つは、震災前の街を思い浮かべて記憶を辿る様子から、その記憶が立ち上がっている空(空)です。そこに耳を傾けたいという思いでつけました。カメラには写すことのできないものたちが、人々の懐かしみながら語る声や、それを聞く阿部さんの表情から、見えないけれど伝わってくるのです。それを映像で表現したいと思いました。

津波で失われた街の上に土が盛られ、新しい街が作られていく移行期の数年間を、断片的に記憶が思い出されては遠ざかっていくように、かさ上げする前の地面を訪ねていくように、阿部さんの声をつたって映画に定着させたいと思い『空に聞く』ができました。この映画をつくりながら、地面から空へと街の人々の視線が移っていくのを感じ、わたし自身が次にカメラを向ける先を教えてくださいました。新しい街の風景が映画を通してどんな風に見えるのか。映画を見てくださる方それぞれに感じてくだされば幸いです。

小森はるか

〈監督・撮影・編集〉小森はるか 〈撮影・編集・録音・整音〉福原悠介

〈特別協力〉瀬尾夏美 〈企画〉愛知芸術文化センター

〈制作〉愛知県美術館 〈エグゼクティブプロデューサー〉越後谷卓司 〈配給〉東風

2018年/日本/73分 ©KOMORI HARUKA

追手門学院大学社会学部芸術文化事業

映画上映会 & トークセッション



2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年以上が経過しました。その時間の流れのなかで、さまざまな風景が刻々と変化していきました。そうした風景の変化を映し出す『空に聞く』は私たちに何を喚起するのでしょうか。トークセッションでは、本作をめぐる記憶や記録、社会とメディア、そして震災と生きることなどについて共に考えていきます。

登壇者

小森はるか Haruka Komori

1989年静岡県生まれ。映像作家。映画美学学校12期フィクション初等科修了。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業、同大学院修士課程修了。2011年に、ボランティアとして東北沿岸地域を訪れたことをきっかけに、画家で作家の瀬尾夏美と共にアートユニット「小森はるか+瀬尾夏美」での活動を開始。翌2012年、岩手県陸前高田市に拠点を移し、人々の語り、暮らし、風景の記録をテーマに制作を続ける。現在は新潟在住。一般社団法人NOOKのメンバーとしても活動している。劇場公開作品に、『息の跡』(2016)、『空に聞く』(2018)、『二重のまち/交代地のうたを編む』(2019/瀬尾夏美と共同監督)がある。



富田大介 Daisuke Tomita

芸術文化観光専門職大学准教授。Ph.D.(神戸大学)。舞踊や演劇など上演芸術の研究・教育・実作にたずさわる。主な企画や出演に「RADIO AM神戸69時間震災報道の記録」リーディング上演(神戸大学百年記念館)、『PACIFIKMELTINGPOT』(鳥の劇場、ランス国立舞台台)、『The Show Must Go On』(彩の国さいたま芸術劇場)、著書や論文に『身体感覚の旅』(編著、2017年、大阪大学出版会)、『土方異の心身関係論』(『舞踊学』35号)などがある。



井口暁 Satoshi Iguchi

追手門学院大学社会学部准教授。Ph.D.(京都大学)。専門は社会学理論、リスク社会学、ルーマン研究。著書に、福島第一原発事故をめぐる論争の分析を試みた、『ポスト・11のリスク社会学——原発事故と放射線リスクはどのように語られたのか』(2019年、ナカニシヤ出版)がある。論文に『構築主義論争とルーマン理論』(『現代社会学理論研究』15巻)、『異質性を基礎とした協同形式としての了解』(『ソシオロジ』62巻1号)などがある。



松谷容作(司会) Yosaku Matsutani

追手門学院大学社会学部教授。Ph.D.(神戸大学)。専門は美学・芸術学、映像メディア論、視覚文化研究。感性的転回以降のアート実践、アートと科学技術また環境との関係、様々な生物や事物に共通する感性のあり方などを研究している。著作として『クリティカル・ワード メディア論』(共著、2021年、フィルムアート社)、『スクリーン・スタディーズ』(共著、2019年、東京大学出版会)などがある。

参加申込方法

申し込み期間 | 11月11日 - 12月16日

- ・参加希望者が多い場合は抽選になります。
- ・抽選結果は12月20日にお伝えします。
- ・キャンセルや社会状況等に応じて追加当選ないし再募集することがあります。

専用申し込みフォームからお申し込みください。

<https://logoform.jp/form/2Qoq/149908>



会場アクセス



茨木市福祉文化会館(オークシアター) 5F文化ホール

〒567-0888 茨木市駅前四丁目7番55号 Tel: 072-623-3962

JR茨木駅から東へ徒歩8分 阪急茨木市駅から西へ徒歩9分

問い合わせ先 | 茨木市文化振興課 072-620-1810(9:00-17:00)

ご来場の際は、新型コロナウイルス感染症予防にご協力ください。

最新の情報等、詳細は茨木市文化振興財団のウェブサイトにてご確認ください。

<https://www.ibabun.jp/covidtorikum202011/>